不辭歌裏斷人腸　辞せず　歌裏に人の腸を断つを
只怕有腸無處斷　只だ怕る　腸の断つ所無き有るを
（陳師道　木蘭花「陰陰雲日江城晩」）

因夢聊攜手　夢に因って聊か手を携え
憑書續斷腸　書に憑って断腸を続く
（向子諲　南歌子「梁苑千花亂」）

といったように、〝断腸〟という語に修辞的なバリエーションを加えるようになったことである。ここにみられるのは、〝断腸〟の内包するものを拡張してゆくという傾向ではなく、〝断腸〟という固定した形に様々な修辞的バリエーションを加えることによって効果を生み出し、悲哀や憂愁を新たな角度からうたおうとする傾向といえよう。そして、それは詞という文学形式のもつ一面を窺わせてくれるように思えるのである。

〈注〉

（12）ただ、〝愁腸断〟は中唐以後に割とよくみられる。

ションはまだ生まれていない。

(11)『中国古典詩における「春」と「秋」―詩的時間意識の異同を中心に―』(『東方学』第六十七輯、一九八四年一月)四頁参照。

むすびにかえて

唐詩における〝断腸〟と春との結び付きについては、以上述べたことが指摘できると思う。それでは、唐五代詞や宋詞についてはどうなのだろうか。『花間集』や『南唐二主詞』、馮延巳『陽春集』の用例をみると、唐五代の詞も晩唐期の詩と同様の傾向を示しているとみてよさそうである。しかし、宋詞においては、春が秋よりも優勢だとはいえそうだが、晩唐五代におけるほどの差はない。唐代を通じてその内容をふくらませてきた〝断腸〟という語を、宋詞は、羈旅、離別、死別などといった状況における悲哀から傷春、惜春の情までを内包するものとしてトータルに受け継いで、様々な場で使用しているようである。宋詞において、〝断腸〟という語の内包するものがさらにふえたり、あるいは変化したかどうかについては、残念ながらまだ語るべき材料を十分もっていない。ただ、次の二点はいま指摘しておけそうである。それはひとつには、〝愁腸断〟〝柔腸断〟〝離腸断〟〝危腸断〟といったように、〝腸〟に修飾語をかぶせる例が目につくようになったことである。(12) またひとつには、

望欲断時腸欲断　望断たれんとする時、腸断たれんとす
(歐陽修　玉樓春「春山斂黛低歌扇」)

愁腸不似情難断　愁腸は似ず　情の断ち難きに
(同　鵲踏枝「一曲尊前開畫扇」)

込んだ詩語として機能するようになったことは、あたかも、惜春詩の流行が中唐以後に著しくなり、晩唐に至ると盛んに制作されるようになる、という松浦友久氏の指摘と重なり合う。[1] 詩語として安定した地位を得た常用語彙であっても、時代の詩的風土の中で、その内包する意味内容は微妙に変化や増幅が加えられてゆくものであろう。〝断腸〟という語もそうした語彙のひとつといえるのではないだろうか。

〈注〉

(8) 李紳（4）、朱慶餘（1）、雍陶、李遠（1）、杜牧（8）、許渾（4）、李商隠（18）、喩鳧、劉得仁、薛逢（3）、趙嘏（4）、盧肇、姚鵠、項斯、馬戴、薛能、韓琮（1）、李群玉（2）、温庭筠（1）、段成式、劉駕、劉滄、李頻、李郢、崔珏（1）、曹鄴、儲嗣宗、于武陵、司馬扎、高駢（1）、于濆、李昌符、汪遵、許棠、邵謁（2）、林寛、皮日休（3）、陸亀蒙（1）、司空図（2）、周繇、聶夷中、顧雲、張喬、曹唐（2）、来鵠、李山甫（1）、李咸用、胡曽、方干、羅鄴（1）、羅隠（4）、羅虬（1）、高蟾、章碣、秦韜玉、唐彦謙（2）、周朴、鄭谷（3）、許彬、崔塗（2）、韓偓（8）、呉融（12）、杜荀鶴（1）、韋莊（14）、王貞白、張蠙、翁承贄、黄滔（1）、殷文圭、徐夤（4）、銭珝、喩坦之、崔道融（1）、曹松、蘇拯、裴説（1）、李洞、唐求、于鄴、周曇、李九齢。なお、温庭筠の「楊柳枝」の二例は詞における例として除外した。

(9) 他の二例は「残牡丹」「惜花」。

(10) この形の用法はすでに梁簡文帝にみえてはいる（注(3)）。すなわち、

　年還樂應滿、春歸思復生、桃含可憐紫、柳發斷腸青　（春日）

である。そして、おそらくこれを意識した用例が初唐期にひとつみられる。

　天津橋外陽春水、天津橋上繁華子、……、可憐楊柳傷心樹、可憐桃李斷腸花　（劉希夷、公子行）

がそれである。さらに、李白がこれをうけて、

　天津三月時、千門桃與李、朝爲斷腸花、暮逐東流水　（古風第十六首）

とうたったのが、管見では盛唐における唯一の例である。しかも、劉、李の二例ともに作品全体は傷春や惜春の情に中心があるのではなく、春の点描といった程度の使われ方である。簡文帝の例の方がどちらかといえば春愁に近いのであり、劉、李はその表現の形だけを借用したものとみえる。また、中唐期にも戎昱にひとつ、

　江柳斷腸色、黄絲垂未齊　（江上柳送人）

の例がある。

以上の例はいずれも孤立した例であり、また〝断腸〟が修飾しているのは柳と桃李のみであって、晩唐期のようなバリエー

となるのだというのである。それは、梅（ひろくいえば春の花）は〝断腸〟を喚起するものであり、また春は〝断腸〟の季節なのだという認識によって支えられていると考えられるのである。

以上、唐詩において、〝断腸〟という語が春という季節と密接な結び付きをもつようになったことを指摘してきたが、ここで〝断腸〟と秋について触れておこう。

管見では、唐詩において〝断腸〟という語と、たとえば悲秋といった感情とを密接に作品の中で結び付けて表現した例はまずない。例外として、白居易の

大抵四時心總苦　大抵　四時は心總て苦しくも
就中腸斷是秋天　就中腸断するは是れ秋天

（暮立）

が挙げられるくらいであろう。その理由を考えてみると、〝断腸〟という語が本来的に表わす〝腸が断ち切れるほどの鋭い痛みの感覚を伴った悲哀〟と、秋という季節が我々に感ぜしめる悲哀とが元来ストレートに結び付きやすいからかも知れない。つまり、詩人としては殊更に秋と〝断腸〟とを作品中で結び付ける必要、あるいは魅力を感じなかったからではないだろうか。これに対して、春という季節は温柔な感覚を伴う。そうした感覚と本来鋭い悲哀を表わす〝断腸〟とを結び付けることが、とくに晩唐期の詩人たちにとって、小さいものではあっても、新しい文学的世界の創造たり得たのかも知れない。

また、初めは秋という季節の中での悲哀、それも羈旅や別離、死別などの厳しい状況の中でのそれを表現する言葉であった〝断腸〟が、中唐以後、とくに晩唐期に至って、春という温柔な感覚に包まれた中での憂愁や悲哀をも取り

（韓琮、駱谷晩望）

は花咲く枝を修飾したものである。また、次のような例もある。

(1)　更把玉鞭雲外指、断腸春色在江南

（韋荘、古離別）

(2)　月明無睡夜、花落断腸春

（呉融、和韓致光侍郎無題三首四十韻之一）

(3)　曾逐東風拂舞筵、樂遊春苑断腸天

（李商隠、柳）

この三例は、韓琮の例よりもさらに広がりをもった形で捉えられた春を〝断腸〟が修飾したものである。さらに次に挙げる例は花と〝断腸〟が結び付いているのだが、少しひねった表現になっている。

共月已爲迷眼伴　月と已に迷眼の伴と為り
與春先作断腸媒　春の与に先に断腸の媒と作る

（皮日休、行次野梅）

二句ともに主語は〝野梅〟である。梅は初春に咲く。そこで、梅は諸花に先がけて春の〝断腸〟を引き起こす媒介

(1)　芳草復芳草、斷腸復斷腸
　　（杜牧、池州春送前進士劉希逸）

(2)　一度逢花一斷腸
　　（崔塗　江雨望花）

(3)　二月春風最斷腸
　　（羅隱　逼試投所知）

がよい例である。作品全体は、(1)は送別、(2)は羈旅、(3)は試験を目前にして知己を頼むという状況を背景にしている。まず、(1)において、芳草と〝断腸〟とが結び付けられているのは対句の平行性を通してではある。しかし、その対句が同語反復という単純な形をとっているがゆえに、かえって結び付きが強くなっているといえる。また、(2)、(3)は一句の中で春の花や春の風が〝断腸〟と結び付けられたものだが、とくに(3)は、盛りの春に吹く風は最も〝断腸〟だ、と言い切った形である。これは□における例(3)、(4)と同様ともいえるが、より簡潔にかつ直截的に〝断腸〟が春の景物と結び付けられているといえよう。

しかし、さらに注目されることは、〝断腸〜〟という形で、〝断腸〟が春やその景物、あるいは春に関連した語を限定修飾するという用法が、晩唐期になって目立つことである。こうした用法は晩唐以前には皆無かというとそうではない。[10] しかし、それが複数の詩人によって使用されるのは晩唐以後だといってよい。これも、〝断腸〟と春との結び付きが詩人たちの間で安定した認識として働いていたことの表われとみられるのである。たとえば、

公子王孫莫來好、嶺花多是斷腸枝

腸断殘春送牡丹　腸断して残春牡丹を送る
風雨數來留不得　風雨数ば来りて留め得ず
離披將謝忍重看　離披として将に謝らんとするを重ねて看るに忍びんや
氛氳蘭麝香初減　氛氳たる蘭麝　香初めて減じ
零落雲霞色漸乾　零落たる雲霞　色漸く乾く
借問少年能幾許　借問す　少年能く幾許ならん
不須推酒厭栖盤　須いず　酒を推して杯盤を厭うを

(1)の丙辰年とは乾寧三年（八九六）で、韋荘六十一歳の作。鄜州の郊外より城内へと続く道、そこには春の草が生い茂り、紅や白の花々がひと群またひと群と見える。芳草と花という春を代表する景物が目にしみ、そこに何とも切ない感情が湧きあがってくるのである。(2)はさらに明確な形で春愁ゆえの〝断腸〟をうたっている。(3)、(4)、(5)はいずれも惜花、ひろくいえば惜春の情をうたった例である。〝腸断未忍掃〟〝腸断東風落牡丹〟〝腸断殘春送牡丹〟の句が、惜花（惜春）の心情と〝断腸〟との密接な結び付きを端的に示している。なかでも、(5)の李建勲は唐末から五代の人で、その今に伝わる詩は九五首、〝断腸〟を用いるのは四例であるが、すべて春を背景にしたものであり、かつ三例までが惜花の情を表わしている。[9]

このように、晩唐期以後、〝断腸〟が傷春や惜春、惜花の心情と強く結び付くということは、春という季節こそは〝断腸〟を喚起するにふさわしい季節だ、といった詩的認識が、詩人たちの間で成立していたと推測させてくれる。事実、客愁や別離等の悲しみや愁いをテーマとした作品においても、一句あるいは連なった二句の中で、春の景物（とくに花や芳草）と〝断腸〟とを直截に結び付けて表現することが以前に増して出てくる。それは、たとえば、

人稀江日西　人稀にして江日西く
春愁腸已斷　春愁に腸は已に断たれ
不在一作待子規啼　子規の啼くを待たず

(3)　落花　李商隱

高閣客竟去　高閣　客竟に去り
小園花亂飛　小園　花乱れ飛ぶ
參差連曲陌　參差として曲陌に連なり
迢遞送斜暉　迢遞として斜暉を送る
腸斷未忍掃　腸断して未だ掃くに忍びず
眼穿仍欲稀　眼穿たれて仍お稀ならんとす
芳心向春盡　芳心春に向いて尽き
所得是沾衣　得る所は是れ衣を沾らすのみ

(4)　郡庭惜牡丹　徐夤

腸斷東風落牡丹　腸断す　東風牡丹を落らし
爲祥爲瑞久留難　祥を為し瑞を為すも久しく留まること難し
青春不駐堪垂淚　青春駐まらずして涙を垂すに堪えたり
紅豔已空猶倚欄　紅艶已に空しく猶お欄に倚る

(5)　晚春送牡丹　李建勲

攜觴邀客遶朱闌　觴を携え客を邀えて朱闌を遶る

還纈は用例とすべきであろう。

（四）

晩唐期における用例は、『全唐詩』において、李紳以下の八一人中、三三人にみられ、計一一五例を得た。[8] そして、作品における季節を限定できると認められるものの内で、春は三八例、秋は一二例である。ここに至って、春の秋に対する優位がはっきりといえよう。なお、五代の用例であるが、詩人の数も作品の数も少なく、数字を挙げても比較になりにくい。そこで、晩唐期に付随して言及することにしたい。

さて、晩唐期に至って、〝断腸〟という語は春との結び付きを一層固くするわけだが、傷春や惜春などといった、春やその景物によって喚起された心情を〝断腸〟で表現することも、中唐期以前よりはるかに多く、春三八例中で半数近くがそれと指摘できるようである。たとえば次の例が挙げられる。

(1)　丙辰年鄜州遇寒食城外醉吟五首之二　韋莊

雕陰寒食足遊人　雕陰の寒食　遊人足く

金鳳羅衣濕麝薰　金鳳の羅衣　麝薰湿う

腸斷入城芳草路　腸断す　城に入る芳草の路

淡紅香白二羣羣　淡紅香白　一群群

(2)　嘉陵　鄭谷

細雨濕萋萋　細雨萋萋たるを湿らし

勞鶯轉豔叢　鶯を労して艶叢に転ぜしむ
可憐腸斷望　憐れむべし　腸断の望
併在洛城東　併て洛城の東に在り

(3)　桃花　元稹

桃花深淺處　桃花　深浅の処
似匀深淺妝　深浅の妝を匀えるに似たり
春風助腸斷　春風　腸断を助け
吹落白衣裳　吹き落とす　白衣裳

(1)の例では惜春の情が〝断腸〟という語に荷わされているといえよう。(2)は春色そのものを詠じた作品であり、春色に満たされてゆく情景を〝断腸〟の眺めだと嘆じている。(3)は惜花の心情を〝断腸〟で表現しているものである。しかし、このような〝断腸〟の用法は中唐期ではまだわずかである。これが目に見えて増加するのは晩唐期になってからである。そこで、次には晩唐期の例についてやや詳しく述べよう。

〈注〉

(7) 劉長卿(3)、蕭穎士、孟雲卿、韋応物(1)、李嘉祐(2)、皇甫曽、錢起、元結、張繼、韓翃、独孤及、郎士元(1)、秦系、厳維、顧況(4)、耿湋(1)、戎昱(3)、戴叔倫(5)、盧綸、李益(3)、李端(3)、暢當、楊憑、楊凝(1)、楊凌、司空曙、崔峒、張南史、王建(1)、劉商(1)、朱湾、于鵠、朱放(2)、武元衡(2)、権德輿(4)、羊士諤、楊巨源(1)、令孤楚(1)、裴度、韓愈、王涯、陳羽(3)、欧陽詹(3)、柳宗元(1)、劉禹錫(4)、張仲素、呂温(1)、孟郊(3)、張籍、盧仝(3)、李賀(1)、劉叉、元稹(16)、白居易(31)、楊衡(1)、牟融、劉言史(2)、雍裕之(1)、徐凝(1)、李徳裕(1)、熊儒登、李渉、陸暢、鮑溶(2)、舒元輿、殷堯藩(1)、沈亜之、施肩吾(1)、姚合、周賀、鄭巣、章孝標(1)、顧非熊、張祜(8)、裴夷直、賈島。なお、李賀の用例を注(2)松浦論文は0とするが、「有所思」：琴心與妾腸。此夜斷。

する心情やその景物によって喚起される感情が、〝断腸〟という語によって表現された例がいくつかみられるようになるのである。それは換言すれば、傷春や惜春あるいは惜花といった心情をも、〝断腸〟という語が荷うようになり始めたということである。

(1)　慈恩寺残春　耿湋

雙林花已盡　双林　花已に尽き
葉色占殘芳　葉色　残芳を占む
若問同遊客　若し同遊の客に問わば
高年最斷腸　高年　最も断腸

(2)　詠春色　楊衡

靄靄復濛濛　靄靄復た濛濛
非霧滿晴空　非霧　晴空に満つ
密添宮柳翠　密かに宮柳の翠を添え
暗泄路桃紅　暗に路桃の紅を泄らす
縈絲光乍失　糸を縈って光乍ち失われ
緣隙影纔通　隙に縁って影纔かに通ず
夕迷鴛枕上　夕べに鴛枕の上に迷い
朝漫綺弦中　朝(あした)に綺弦の中に漫(み)つ
促駟馳香陌　駟を促して香陌を馳せしめ

唐期における〝断腸〟と春との結び付きとは、すべてそうしたものだといってよい。[6]

〈注〉

(4)『全唐詩』については、ある程度まとまった量の作品を伝える詩人についてみるために、その目安として一巻以上を当てられる詩人をとりあげることにする。それで唐詩における〝断腸〟の用例の大部分を尽くしているといって差し支えない。したがって、多少の遺漏のあることは免れまいが、本稿の論旨に影響することはないと考える。

次いで、初唐期三十三人の詩人名を列挙しておく。なお（　）内は用例数で、用例のない詩人はこれをはぶく。また、互見するものは便宜的に『全唐詩』において先出する詩人の例とした。盛唐期以下も同様である。

褚亮（1）、魏徵、楊師道（1）、虞世南、王績、上官儀、盧照鄰（1）、李百藥、張九齢、楊炯、宋之問（5）、王勃、李嶠、杜審言、蘇味道、郭震、崔融、李適、劉憲、蘇頲（3）、徐彦伯、駱賓王（1）、喬知之（1）、劉希夷（1）、陳子昂、張説（3）、李乂、沈佺期（3）、武平一、趙彦昭、鄭愔、賀知章、太宗。

(5) 玄宗、張子容、孫逖、崔国輔、盧象、盧鴻一、王維（1）、崔顥（1）、祖詠、李頎（3）、綦毋潛、儲光羲、王昌齢（2）、常建（1）、陶翰、顔真卿、李華、崔曙、王翰、孟浩然（2）、李白（30）、張謂、岑参（9）、包佶、包何、高適（4）、杜甫（10）、賈至、皇甫冉（1）、劉方平、劉眘虚。なお、杜甫の用例は通行の索引では十一例あるが、これは付載された高適詩の一例を含んだもの。

(6) ただし、杜甫の次の例はこの時期における唯一の例外といえる。

腸断春江欲盡頭、杖藜徐歩立芳洲、顚狂柳絮隨風去、輕薄桃花逐水流（絶句漫興九首之五）

(三)

中唐期の用例はかなりふえる。『全唐詩』によれば、劉長卿以下の七六人中、〝断腸〟を用いているのは三八人、計一二四例を得た。[7]

そして、一二四例の内で、作品における季節が春と判断されるものは二四例、秋は二一例である。この数字は、中唐期においても初盛唐期と状況はほとんど変わっていないことを示している。しかし、中唐期において注目しなければならないのは春と〝断腸〟との結び付きの内容である。この時期、とくに元和期以後において、春という季節に対

窮荒絶漠鳥不飛　窮荒絶漠　鳥は飛ばず
萬磧千山夢猶嬾　万磧千山　夢は猶お嬾し
（以下略）

(4)
人日寄杜二拾遺　高適
人日題詩寄草堂　人日詩を題して草堂に寄す
遥憐故人思故鄉　遥かに憐れむ　故人の故郷を思うを
柳條弄色不忍見　柳條色を弄んで見るに忍びず
梅花滿枝空斷腸　梅花枝に満ちて空しく断腸す
身在遠藩無所預　身は遠藩に在って預る所無く
心懐百憂復千慮　心は懐く　百憂復た千慮
（中略）
龍鍾還忝二千石　龍鍾　還って二千石を忝くし
愧爾東西南北人　愧ず　爾東西南北の人に

右の四例は、いずれも春風、柳、春草、梅花などの春の景物をうたいこんだ中での〝断腸〟である。しかし、その〝断腸〟とは、決して春という季節そのもの、あるいは春の景物によって直截に喚起された感情とはいえない。(1)、(2)においては愛する男性との別離、(3)は羈旅と友人との別れ、(4)は友人との別離、というように、悲哀を生ぜしめる状況がすでに存在していて、そうした状況ゆえに春やその景物に悲哀を感じ取っているといえる。つまり、〝断腸〟で表わされる悲しみや愁いが、状況の介在なしに春やその景物によって喚起されているわけではないのである。初盛

(1)

折楊柳　宋之問（一作沈佺期詩）

玉樹朝日映　玉樹　朝日映え
羅帳春風吹　羅帳　春風吹く
拭涙攀楊柳　涙を拭って楊柳を攀れば
長條宛地垂　長き條　地に宛って垂る
白花飛歴亂　白花　飛んで歴乱たり
黄鳥思參差　黄鳥　思い参差たり
妾自肝腸斷　妾自ら肝腸断たるるも
傍人那得知　傍人那んぞ知るを得ん

(2)

春思　李白

煙草如碧絲　煙草　碧の糸の如く
秦桑低緑枝　秦桑　緑枝低る
當君懷歸日　君が帰るを懐うの日に当たり
是妾斷腸時　是れ妾が断腸の時
春風不相識　春風相識らざるに
何事入羅帷　何事ぞ　羅帷に入る

(3)

與獨孤漸道別長句兼呈嚴八侍御　岑參

輪臺客舍春草滿　輪台の客舍　春草満ち
潁陽歸客腸堪斷　潁陽の帰客　腸断つに堪えたり

七九年。のちに『詩語の諸相』収載）の前半部分を参照されたい。

（3）秋の例は、魏文帝「燕歌行」（『文選』巻二十七）「雑詩」其一（同巻二十九）、鮑照「東門行」（同巻二十八）、釈宝月「行路難」（『玉台新詠』巻九）、湯恵休「秋風歌」（同巻九）。春の例は、沈約「詠桃」（『玉台新詠』巻五）、梁簡文帝「春日」（同巻七）。

（二）

初唐期における〝断腸〟の用例はさほど多くはない。『全唐詩』によって検索したところでは、褚亮以下の三三人中、これを用いているのは一一人で、計二一例を得たにすぎない。[4] 次いで盛唐期は、玄宗以下の三一人中、一一人が使用し、計六四例を得た。[5] これは一見初唐期よりもはるかに使用頻度が増したかのようであるが、実はその内の四九例が、李白の三〇例、岑参の九例、杜甫の一〇例で占められている。これを除くと八人で一五例となって、盛唐期の詩人全体としての〝断腸〟愛好の度合いは、初唐期とあまり変わらないとみておいた方がよさそうである。ただ、〝断腸〟という語を好んで用いる詩人が出てくるのは盛唐になってからだということは指摘できる。

では、作品における季節とのかかわりはどうなっているだろうか。まず初唐期だが、二一例中、秋と判断されるものが楊師道、盧照鄰、沈佺期の各一例、春は宋之問に四例、蘇頲、劉希夷、沈佺期に各一例である。すなわち、春七対秋三となって、六朝以前とは逆転している。ただ、七対三という数字は、合計しても一〇という小さな数の中での対比であることを考慮に入れておくべきであろう。次に盛唐期についてだが、逐一詩人名を挙げることはしないが、六四例中、春が一九例に対して秋が一二例と認められ、やはり春の方がやや優勢といえる。以上、初盛唐期については、春の〝断腸〟との結び付きの、秋のそれに対する優位が確立しつつある時期だと見做せよう。

それでは、初盛唐期の〝断腸〟と春との結び付きの内容をいくつかの例を挙げてみてみよう。なお、以下用例を引くときは、作品全体の中でみるためにできるだけ全文を示すことにしたい。

ることもあるので、作品にうたわれている季節を必ずひとつに決定できるわけではない。したがって、いささか恣意的になるおそれはあるが、明確にひとつの季節に限定できると判断された作品にしぼって、この問題を論じてゆくことにしたい。

〈注〉

（原稿受領日　一九八四年五月八日）

（1）本稿で扱う〝断腸〟のほかに、たとえば〝多情〟〝夢回〟〝断魂〟〝凄涼〟などが挙げられる。

（一）

唐詩における用例の検討に入るまえに、まず『文選』と『玉台新詠』によって六朝以前の用例をみておこう。[2] 両者ともに索引があるので一々挙げないが、『文選』には五例、『玉台新詠』には九例（『文選』との重複一例を除く）の〝断腸〟がみえる。その内で作品における季節をひとつに限定できるのは七例だが、五例までが秋によって占められており、春は二例にすぎない。[3] これによれば、六朝以前の〝断腸〟は主として秋と結び付いていたと考えられる。実際、さらに拡げて『全漢三国晋南北朝詩』によって用例をひろってみても事情は変わらない。ほとんどが秋と結び付いていて、春と結び付いた例はまずない。つまり、六朝以前の〝断腸〟は秋という季節の中での悲哀を表わす語として機能していたと考えられる。したがって、さきの春と結び付いた二つの例は孤立したものだといえようが、それがともに六朝末期の梁代のものだという点には注目しておいてよい。というのは、〝断腸〟という語は初唐に至ると、春との結び付きが秋とのそれを上回るようになるからである。梁代はそのための転換期であったといえるかも知れない。

〈注〉

（2）詩語としての〝断腸〟の成立及び六朝以前の用例については、松浦友久氏『「断腸」考』（『中国古典研究』第二十四号、一九

唐詩における〝断腸〟

――読詞のための覚え書き――

中原健二

はじめに

宋詞が、その語彙のなかに、いわば常套語を多く含むことは容易に看取されるところだろう。[1] そして、そうした語彙は宋詞に至って創られたというより、やはり唐詩あたりで使われていたものが多いようだ。たとえば、〝断腸〟あるいは〝腸断〟という語は、唐詩で盛んに使われたけれど、宋詞においては枚挙にいとまがないほどの高い頻度であらわれること、まったく前者の比ではない。『全唐詩』によって大まかに検索してみると、〝断腸〟（以下では〝腸断〟の形をも含めていう）という語を用いている詩人はまだ全体の半数足らずとみられるのだが、宋詞に至っては、百首前後を越えるまとまった数の作品を伝える詞人で、〝断腸〟をまったく使用しないものはほとんどいないといってよい。あたかも宋詞専用の語彙であるかのようだ。

ところで、この〝断腸〟という語が唐詩においてどのように使われてきたかをたどってみると、作品にうたわれている季節との関連にひとつの傾向を見出すことができる。それは、すなわち、春という季節と〝断腸〟という語の結び付きである。この小論では、そのことを指摘して、宋詞における〝断腸〟という語を捉えるための覚え書きとしておきたい。ただ、いうまでもなく、作品によっては季節のあらわれぬものもあるし、また複数の季節がうたわれてい